女今川錦の小家

全

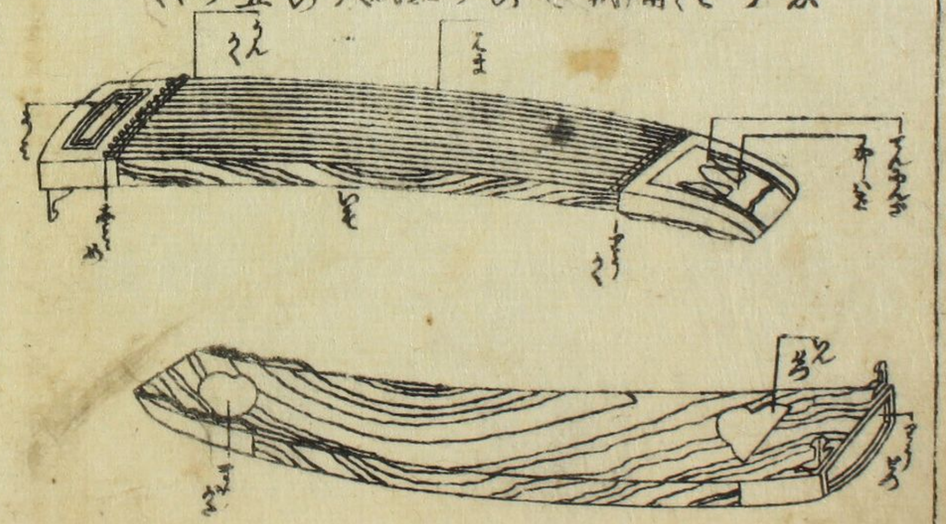
今川錦小園

蓬莱の基いえとやれ
山をめぐりくく
名ぢく南海の
亀甲に
のせうひ出
きらきら
金銀珠玉
をつ祝不
老不死の菜
あり仙人初
通を汐てせ山南ふ
集り住る間出度時
ゆ名初春にのざり食積とし

九曜文庫

和琴乃圖

文筆ハ其者始るゆ来
上古の世思ひそもそびゆ入り
虚こそ神養そしめそつくて
ゆ人美帝ハいろうく宮南南
儀羽の人音絃ごのくゆ人吾朔
こて人天のうもめれきさじめて
天のうもそそうそ〜ぐく才この
琴見をこれ人なすふ
清見ゆの天をうくいろ
ゆひて祝曲をたくゆ人ゆ天人
琴をくて天ぐり舞の
神ひるぐ〜るこうゆ見五
ぎちれすひろちめとそ
ぎくにムちちにをせ〜人く
あすこそたきこえにゆり



琵琶三味線の圖

用弄こそ三味線とそ也ハ
文禄ゆ〜ろ村検校と云〜ひと
琉球の者にこと〜り〜ゆかの
清に小弓をそのてあそぶ毛びハ
をちゆ〜ゆるこのゆ〜り糸の玉人
ゆ〜ゆ三ハびをたおうゆ三ハ糸ハ

ぢハの三よりニてゝしわどたりく
あらもゝるものをり石むゝ拍子
くりくれすゝくびをもゆゝく
三味線をほくり出せりしゝ

年中祝事の始

○正月の元日を三元といふ又[illegible]睦月といふ也 [illegible] 初春ともいふ [illegible] 祝詞を申し [illegible] 一年の始なる故 [illegible] 悦びあへるよし [illegible] 元日といふ一年の始の日 [illegible] 月の始日の始

今川に異見して自らいましむ制詞條々

一 常に心ざしかるく女の道ゆるかせなる事

一 若き女無益の遊興を好み

てんしてより三統とも三郷ともいふなり

あら玉のとしも月日もゆたかにてはじめの春は来にけり　大納言頼朝卿

又元日の祝は唐土にて漢の高祖よりはじまると言 日本にては神武天皇東征して天下を平定ましまして王臣の季をむかへ正月元日に即位ましまし それより正月の祝はじまれり [illegible] 日本は蓬莱とて三方に [illegible] 飾り [illegible] 雑煮を祝ふ [illegible] 元日より六日まで

舞を楽しむ事

一 少さき誤をゆるさずそれ故にかるく人を恨る事

一 大事をも辨なく打とき人にもらする事

門松成て松竹の今世も色づきぬと
賣しる又神酒の肴ゆ
その外れ不連連とうけうう
流要のぶりて成ぬ八ゆり
景ハあり紫生く右素おう
りのゆ人れ子孫ふ由はり
そこして世成るたりと
流要ハ月ひきとつ素
めでゝ月ゆ知ず生成保ときい
いそひこと月ゆ月ある頃よ
門松いりゆ人の巨旦が
墓ゆ一人といひ伝へこれ
刑ひゆ元ゆ・七日七種
の粥ハ祝武天皇ゆ伝へ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
行ゆ・又元・素華・仏の
座・餅菓・稲代ゆ
君ゆ人ゆ七ゆの餅

一父母に孝を尽れ
孝の道深し成
一夫婦の情愛我を互
くもをたゞしく
一道に情て深しる者を

・十六日小豆粥小餅を入く
食ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
疫病をさくるゆ月ゆ
又い日上巳の節ゆ月ゆ
ゆ月ゆ成ゆ月ゆ女の紙を折
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
○二月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ハ命ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ハ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
○三月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ

美しく能ハ事
一正直ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
人を疑ハ事
一拾びゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ
集ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ月ゆ

ゆゑよし五月八日の節句にまつりごとの
菓子いろ〳〵生るゆゑよし深
生ると云をやまくしてやよと
いへるこゝ三日を上巳とて
いつも〳〵八上の巳は其月の
廣土魏乃やうに三日を巳
くいつも〳〵日菖蒲を頒ふ和して
菓餌し〳〵桃花酒をつくる
此二巳を食べを八時氣絶
まつりひろく蒙霧とする祝
〳〵俗にいふ野ふ菓とりて

一物をすゝ紀好変

一短慮思みゝく嫉妬のゝ

深く人乃恥を不恥事

一婦女猛利根よ迷ひ

万事付人を識事

俗とせり由これ男子の
ものまつりき婦女の節句
とすれりゝ女子雛あそびと
すること源氏物がたりに
見えたり其もくの中の雛
家と雛ゝ安鉢をんくろ
ゝ三月八夜の月なれ八
巳と除日とゝて不ト事を
のぞくゝ巳の日乃後
ゝて式日ゝ〳〵ゝ紙おく
興ゝ〳〵ゝ人形と作ることを雛と名ぢ
男女の帝雛とをちゆゝ八
夫婦鳥沢をんこ武ゝ
ゝ上ゝ方おくゝ家年に
ても去のゝ八ゝをゝひむゝれば
なり

○四月ゝ〳〵きゝ八ゝ月の
の花さうゝ笑ゆゑよし年の
ゝ形月とゝをゝ年くゝ
○初日を衣更ゝ云ゝ日ゝ
歴ゝ八節ゝのゝ菖蒲末をゝる

一人の中言を企人乃

稽をとゝ〳〵ゝ〳〵ゝ武家乃

一衣類乃色は義恥

をゝ百仕見若事

一世ゝ勝意法をゝ武

女中方下部なり下ゝ八
諸とも若初るなり。八日を
灌仏とて寺院にて釈迦仏
を立て香水をかけて沐浴
するなり今日禁中にても
おこなはるよし
○五月さつき此月田を植
るゆゑ稲中ゆゑ早苗月と
いふ或田植せりといふ又日
を端午といふ端ハはしめと
いふ字之月の始といふこと
今日ハ午にあたる由なり
粽ハもろこし屈原といふ人屈原が
汨羅に身を沈めし日なりとて
いへり又粽を投て供養
ねんごろに[illegible]
[illegible]
菖蒲を軒にふき又
とよりて此月一族生ずる月
[illegible]
せう端午を祝ふべき
業として[illegible]の気を払て

一 不[illegible]遊を好み
一 人の非を挙け我
智恵をあらはす事
一 出家沙門に対面を
云ふとも側近なる事

端午あるひハ[illegible]
[illegible]祝ふ此日
幟甲人形を立て男子を
祝するハ早良親王の
幽魂を退治し[illegible]
伝ふなり
○六月水無月といふ此月
暑気つよく水[illegible]
[illegible]
[illegible]朔日法[illegible]の氷室
より献上[illegible]
又氷餅を食ふことあり此
月晦日水無月の祓を
[illegible]
又名越祓ともいふ
みな月の名を[illegible]
祓をする人ハ
千とせの命のぶ
[illegible]
此祓[illegible]
[illegible]

一 我分際を考す或ハ
驕りあるひハ不足なる事
一 下人の善悪を不辨
召し使ひ方正
からざる事

○七月の節句ハ文月と
いふなりきをとかく〳〵
そうとうの七夕にりろくの
文字成ひらがなゆゑ志
ずるよし・七日を七夕とも
[illegible]
女の二星祖河の名にて今
[illegible]
結髪又養蚕香ゑ成就
[illegible]
[illegible]

一男女とも持ものゝ
[illegible]
[illegible]織を習ふ事

一絶子ふ踏ず事他人の
[illegible]
朔を取ざる事

一男ゝ[illegible]よい縄間をき
[illegible]

そ[illegible]ものをなして[illegible]
も[illegible]成就すゝ[illegible]
[illegible]巧奠といふ今[illegible]
[illegible]成[illegible]星[illegible]
その[illegible]村の[illegible]糸を
通し[illegible]ものハ[illegible]
[illegible]唐土漢の
世ふ始[illegible]日本ハ天平
御宝[illegible]
[illegible]
男女も梶の葉ゑ[illegible]
[illegible]
を食[illegible]ハ瘡をのがゝ[illegible]
・十五日成中元[illegible]月十五日
八上元十月十五日下元[illegible]
仏法[illegible]十二月[illegible]
十五日[illegible]盂蘭盆[illegible]
[illegible]亡者の[illegible]
[illegible]日連の母[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]十四日ハ[illegible]

一親[illegible]り[illegible]を[illegible]
を[illegible]

一道[illegible]る人をきゝひ
[illegible]に[illegible]ふ友を
愛する事

とて面授をいとなみこれをなげふ利鎌倉の板
とりつてすることなり七月中
わふ蛇蝎をてしに亡夏の為
とぞ
○八月葉月といへば木の葉
ちるころとて落る月ゆえ葉
月といふをまたちなり
・朔日を八朔といへ又八専の
節句とも云秋の田実のる元
なれた田の実といふこと
稗穀を食すること八十八代後深
草院のほう宮遠長年中より
此事ありしとなのむと
いふ所ふようてを人犯ることり
ひき色を送りて祝ふなり
○九月菊月といふ後朝花
ゆえ菊花月とも云略せり
・九日八重菊とのこれは九八陽
の数なれば月も日もれなれば
いふ人此日菊花の酒をのみ
寿命をのべ長命なり

一人来る時こゝろ不穢燈
ふまるの暗いう雪ぬうを
安穏の事
右ゝ源こゝろ考こんふけらる
屋さこと孫ゝ由ゝ

いる仙人の出家なるため
ようふこりて禁酒あもも
陽の宴とく行なること
此日菊花酒八百歳を云る
ことぞ
○十月神無月といふこの月
りろくの神ゝちへ出雲大
社へ行ゆひく余ふこ神元
ゆえ名付ることなり
仲秋冊言霜降なり
なれば神ふ一月まもなり
此月の末社日を秋の子とて
りちて祝ふこて祝人なり又
玄猪ともいふ医ふ十月亥
の日りちて食すれば病ず
ものなり又女子を祝る人を
一しれ亥の子祝ふこと
亥ハ多くゝをとうむりの名
それをあやゝんこと祝人
てなり
○十月霜月ともいふ月
といをとるゝ

以前牡丹はたしむ屋なこと
耶雪先家を清るべ歳
みはまゝちぢ亜みゝ毎
事我をこ五ぶ丈芸こ祝ふ
祝ふ屋ゝ玉神天も陽

十一月髪置袴着帯解元服抔などとすることハ霜月ハ一陽来復の月なれバそれを祝ひてすべて祝儀ごとハ此月を用ゆによろし

○十二月を志はすと云ハ此月仏名経などよミ師僧を請ず敬ひ八備へしろゆゑ二師走月といふをあやまりて也此月上十二月の和名ハしはす清輔が奥儀抄の説をのせたり・せつぶんを年越とて鬼大豆をまきて鬼やらひとて福ハうちととなへて悪鬼をはらふことを追儺ともおにやらひともいふなり源氏物語にも鬼やらひをあそバせし事あり禁中にてもありて文武天皇慶雲三年に始まる此日ひゝらぎと豆の枝をいわしのかしらをつらぬき門戸にさして悪鬼をふせぐまじなひ・晦日に

にして強く男ハ陽なれバ
地ハ陰にして和に女ハ陰
なり陰ハ陽に従ふこそ
天地自然乃道理なれ
夫婦ハもちろを天地なり

除日とハ又大晦日と云一年終るなれバかくいふに歳暮とて祝ひて主人親方へも進物をおくりし又来正月のかざり門松祝儀に用ゆるものなどそのいとなむことなり此日毛も一年の晦日の祝とてそばなどのぞみて福々ともに安寧長寿を祈らんとのいはひとなれバおろそかならぬことなるべしよく慎みつけよ

たとへれバ夫を天と云
ごとくうやまひつかふべし
是を知ぬハ天地乃道理
されバ幼より心だて優さ
しく直なる友に交り

初めとみどりの髪もくく
縫しきと友にを書べうべ
水い方園の実み赤こびひ
人を若恵強友うはと
いかと実物式実を

よく親と法う女を正
しきことを縫うのむは
中傷や彩と実若
恵を知強ふ屋うは
その人乃赤むむ業を

もちひ人べ一世ふ女ふい
ほ一ひのこまく物ま長
志の人人そまれなれを
かやうなるあとうも考
人ふ一山一年中のいられ
とくく渡あるうめ色ハ
そのまゝ明るくしてその
毒ままでふとたゝいい
人のうちに毒でも物ふう
出ふく奥ゆうとうひ
物くの毒を赤くむるも
又仏にあやまうふくの
ありておりしろくいと殊結
うそ仏ある人ハふくその
人ふ赤さいくくものなり

女中食禮抜萃

七又二ふそもろ〳〵三うそも
笠の服ふくもまゞ食しう
ふひのふべ一祝ひの儀色を
ふい大さにりることのまう
ひくひとる女うそもうのその

女ふそもかうふ九ふて来
らひべ一飯二盃三そう
ふひく粕汁のこ成ふひ汁い
すふべうひ次ふを赤ふる
赤ゆうよん物とふべ一も
又飯ふひ二の汁のこと ふひ
二のぜんれさいをふべ一ふハ
仏うそも一色二いろふひふ
毒一様ふまれにあるもの
儀とこうく ふとこう
さ成一度ふ二色ひけく
ふべ一ひうりでうこと
あ一色と二こうまでハ
ふう一ふひ実物いふひの
女むゆそ来一もゆ一
ふう一むりのふもう
とふ一てふべうひ赤一へ
汁とうひくふべ一ひり
ち成うひそふひふ物ゆの
お上に汁とうけくふひふ
ゆとのこのうひ毒を下ふ見
右のまふうんとりちのむし

ゆかた　のこうさらさ
○雑煮　ふつう　女中ハ　れ
よばれこのまゝ　ふべし　汁を
すひあらぐ　雑煮　下ぶるく
ぶし
○湯づけ　ふつう　雑を下に
ゐれたるそ　ふべし　ゆをうく
さも　同おなし　ゆづけのふた
ふたゝこゝろ　ものわるく
よと　ぶべうべ

見るとゆかとこと
ばのまを　をまとにたづ
うきこゝやをり義
みぐ汁女ハ手ぬ海
気遣なる事をこの

○飽飯　ふつう　ゆ　猪の
むくふさ　ぐのきざみの
とりこ　雑をれたふく
汁を　うけそ　ぶ　ふゝ　ゐを
入ひろふ　ふ　紀　合そ　ふべし
ふぐこを　の　ゆ　よべうべ
○強飯　ふつう　ぶ　ぎ　角ふ
ゆうて　出べし　雑あることを
ゆしそ　い　雑　ものなう
ふふく　ゆ　むぶし
○鍋い　物　枝　にさして　焼し
又　ゆまそつまそても　ふべし
○まんぢう　ふつう　ゆ　れ
掛と　人さゝ　ゆびまそつまそ
ふうそ　ふぶよし　低　ゆふ
こうそのるなう
○蒸業　凡　ふつう　たてに
ゆう　割　ゆ　と　ゆ　四こ　全を
出ゆ　べし　ゆ　と　ゆ　れ　凡　ゆ中
ご　成　れ　掛　ゆ　ゆ　と　ふさし
ふひ　ゆ　べし
○索麺　ふつう　汁　をおき

ものと　ゆ　（ぢ　朝夕　あさゆふ　ゆ　ふれ　ゆ　と
こゝ　海　ゆ　と　この　えり　見　み　て
あ　き　紙　さり　善　よき　ふ
うつ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
天常　ご　ゆ　理　り　ゆ　ゆ　ゆ

るが〜一そ〜二ほ〜さう
めんを椀にうすく入く
初汁をあつくつぎ
濃いあつ汁にもちまぜ
入ひてもつ〜〜ばけを
くひらでほとめいくらびも
下に垂すくひとうとくひ
めつべ〜をを切るご男の
中に赤る成うけてまゆる
なるうばさうめんのごとくに
つつべ〜むくこやみをどる
ならば汁へ入るうばうどん
さうめんと同トくひやくある
なり〜
○稼くふる業にてもけ〜
ふくも繁さんを右の方へ
な〜ちをれをくるちて
業のもとれ方と上にう
たにもちてたるそまをを
ほどきてくふなり〜
○業のむるすちやぐらう
のぜくさくるを右そとり

生まれる性いとをも
成長を若人となる事
このるひい意人をかをる
こうやこうれいとけ意
る理は習ふ体なり

のそてたるそとり方〜
下に垂べ〜

婚人給変指南

○意猪をそえ中うたれをを
むふのすの〜ふう押入
手の初〜ふく意をのぜ
右をてだいふちとりちに
垂まうたはけをぬき両ま
ふく意成垂右のまふく
おつまをとりあとへをう

男子ふを師をとり
身を傾るこち成なり
〜〜をるを〜ひりと
いべも女とし〜は
学ぶ志神なき人原

の〆くゝりをたてゝ
○猿をさぶらふ時は面をも
もちおゝ猿へ面さゝり猿を
下に置たれをさゝ面へ押
入一方の〆くゝりを立つゝ
○長柄の扇は右の手にて
紙をてまさぐる右の手にて
一そくにとり猿をつゝ
たの手をつき右おくあげ
口を我方なゝ猿へ面をゝえ
を指猿はいさ見へたくべし
○たゞこぶんは猿成を面
やうにもち出さるゝすべし
○業成系ゝもるる右を
指出さるこ見たの手を
をへ面手おく色なゝ
○びそをゝ人に系ゝもる
ゝを初さめゝ系ゝふりさ
ゝて前をたゝて右
てたちめんのうへをゝ
いそのうゝ成おくゝたの
うゝたゝそに置て打まし

女業法あること成ざる
系ゝ面ゝ系ゝ邪魔
もゝと誠ゝ心をよ
次第なる事いくほど
他業邪ふゆ業

あをのけ為びをのうゝ成
に成中ゝふそりゝ
○琴は左の手をゝらの中
をゞ下に置右のゝ手をゝ
ゝくさゝと成うへ指おゝ
系へゝうゝ中ちく置さ面ゝ
ゝを中せゝふゝに系ゝもし
○笙はせめの面をゝちく
ゆびを作の面へ入さ見とゝが
方へむけつゝのゝをいゞ
をゞ
○力級指系ゝもゝこと
右ゝそ下猿ともに中指を
ゝち左の手成ゝ下さ見へ
業ゝ中ゝくゝふゝさ成指中
ゝてさゝをゝを見指て空ゝで
○扇を系ゝもゝい右おく
うゝめの面をゝちたゝまに
置くいゞをゝ
○扇ふ指すゝそ出をゝぶゝ
うけて置右ゝそゝ中ゝの猿
を指左ゝそゝつ成おゝ出すべし

あゝと
吏ゝ道ひ男姑ゝ佳
舟右ゝふゝ置ゝで父母業
ゝ中に面るゝ去ゝくゝ
乃ゝち面指ゝで業ゝ
ゝをゝ業一ゝり

○梅枝はやーまちうへを
ちうとをうえ人のたれうえ
たーしく手くをあり
○小刀も扇とはあなり
○小袖をうえ人にうせ手
をうりたのそでを通させ
中ねたの袖をはこれーの
これ弟のうえををれく
梅よりくのちかしこあるべ
○花をはしるふうるハ来の花
ちうべ花咲よりかーかをれ

面白粉を粧髪形
を整ほふりをにく
仏供ゆづる我きめん
とする人稀也さらち
ばし恵ふ貪る事

はるにうるうり・梅花
ちうべ花の生成之方梅
はるふうりはるふうるう
○梅木の花ちうべハはるふ
ひるとはやーふれたのうを
ーもくはしをれもはト
やーにてうべ
○ちうあいひーやくあく手
をうくくくちうそひーやく
くーとうちたのをあく
中ねど成りちてかけさぬ
やーにさーくくと流をー
○梅花ハたけまにをえれ
ちそふる手の〻うら成とり
流をべー　夏ハはやーちうを
ちうをふうるーしくするう
ちううをふ手ーする和ハ
むもとをれ梅ハ中手
をべー手のーにあるハ
ひるをくちの花ちう
○香盆ふ香炉ををく文
ちうをーやいうろハ中香

なくハ貧く富ーうり
ハ貧く富ーうり
ハ恥ちも沈邪
な物ちで富といふとも
智ある人ようとまるぬ
屋ー物ーくわの

善悪を知んとおもはゞ
まづ其人と交り
をるべし悪人と交
るべからず悪人と交
る事せりく種
種

○糊糸にするものはいらこ
むしさすらのうへにふるうく
きりはたほしてあるとあるい
もしくはどとすえあるなり
○昆布と栗とにあるいもも
るはきりかぶむけく一きり
あんもるなり
○瓜初とものあるべからく
すべしちなどにひ年一て
年一番まそもさみあぶく
糸にする大きなるべ切方心
あるべし
○瓜のうへにかぶうたの絵ぎ
をえ色のうらの方ようむく
べしうへの数六ぶんむくこ
ちいさく一きれ切くれとう
のうへ瓜あ一切り瓜人の
まくはめそと小刀れ生こそ
つき出をかうみて糸
もるこれ切れとに切くふ
すべし
○数子のうへにかぶうへのう

ばるとあ瓜一人を
めし清のふと日月
茶木國太城照し
あくこて海を
ものひとぐ
をんべし人こう

の方よりむきて切りくるくちをのこしなり
○木綿柿の皮　五ツ
へぎをうすくかわかしをあつ皮一つの柿あどい
二つふたりやくれくさよりむきてうすはかけをつけくまのつまるふり

給夏指南終

一切ものをしつ屋記
なるあること完賢

女今川終

文政九戌年再版
天保八酉年再刻　芝神明前三河町
東都書林　甘泉堂　和泉屋庄市蔵版

信州國東佐久郡
中根村

信州東佐久郡
中根村　名村兵衛